



〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350
TEL 028-649-8649 FAX 028-649-5026 URL http://www.utsunomiya-u.ac.jp
E-mail plan@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp



豊かな発想を地域に、新たな知を世界へ

NOW

● vol.9

発行：宇都宮大学
編集：広報室

CONTENTS

- 1 思いやりと感謝の心
- 2 キャリア教育・就職支援センター
- 4 地域貢献REPORT
- 5 キャンパスみどころMAP峰キャンパス
- 7 キャンパスみどころMAP陽東キャンパス
- 9 SLOW FOOD
- 10 学生アンケート「宇大生は今！」
- 11 INFORMATION
- 12 研究 Keyword



INTERVIEW

思いやり

感謝の心



元上野動物園長

なか がわ しろ ちろ 中川志郎

PROFILE

「ながわ、しろう」1930年、茨城県筑西市(旧真壁郡岡本町)生まれ。51年、宇都宮県立林野専門学校(現宇都宮大学農学部)獣医畜産科卒業。52年、宇都宮大学農学部獣医畜産科専攻科修了。58年、獣医として東京都立上野動物園にて診療業務に従事。上野動物園飼育課長、東京都立多摩動物公園飼育課長、多摩動物公園長を経て、88年、上野動物園長就任。現在、ミュージアムパーク茨城県自然博物館館長、独立行政法人国立科学博物館評議員、(財)WWFジャパン理事、(財)日本青少年研究所評議員、(財)日本動物愛護協会理事、東京農業大学客員教授、(財)文教協会評議員、(財)いばらき文化振興財団理事、(財)日本博物館協会顧問、中央環境審議会動物愛護部会委員、野生生物保護対策検討会委員、独立行政法人評価委員会委員、「動物園学」はじめ、「珍獣図鑑」、「パンダ日記」など著書多数。

人を愛するといふことは他の生き物も愛するということ

「好きな動物はなんですか」との問いに、「好きな動物はいません。でも、口に出さないうように思います。学校の先生が好きで生徒の名前を言えないようにね」と穏やかな表情で答えてくれた中川さん。動物に寄り添い、命というものと真摯に向き合ってきた先輩の言葉からは、生き物すべてを分け隔てなく愛する想いがひしひしと伝わってきた。(取材／農学部卒・中山未来 農学部3年・廣岡貴人)

「命とは何か」を考える

「人間だけではなく、他の動物にも、植物にも同じ命があつて、その命をいただいて僕たちは生きています。『人間が一番偉いんだ。他の動物や植物を利用するのは当たり前』という人間中心主義であつてはいけません。宇都宮大学での生活は、『命とは何か』を真剣に考えるきっかけをつくってくれました。」

中川さんは、終戦間もない1948年、獣医を目指し宇都宮農林専門学校(現宇都宮大学農学部)獣医畜産科に入学。時代の大きな変わり目の中で、多感な青年期を「命」というものに向き合つて過ごした。

「戦時下では、獣医の仕事は軍につながつていた。軍馬をはじめ、争いのために使う馬や牛を育てる、あるいは人間の食糧としての動物を育てることが仕事だった。本来、獣医は動物の命を救うことが仕事であるべきです。相手(動物)の命をもらつて自分が生きていくのだから、その分、相手に愛情を注がなければなりません。」

動物を科学的に追いかけていくことに、むなしさを感じることもあつた。こころの渴きを潤してくれたのは、古本屋で偶然出会つた立原道造の詩集だった。「立原道造が一貫して詠つていたのは、命です。命というものの科学的なアプローチと、もう一つ人間本来が持つているリスリズムという情緒的なアプローチというものが、偶然くっつ

パンダと過ごした日々

実家は畜産農家。動物と身近に接しながら育つた。小学校5年生のときに、将来上野動物園の園長になつると決心した。少年時代、動物ものの本ばかり読んでいました。そこによく登場するのが上野動物園の園長だった。いつのまにか僕の中で、上野動物園の園長という存在が大きなものになっていきました。」

卒業後、上野動物園に獣医として勤務。88年、園長に就任、少年時代の夢を実現させた。

中川さんが「時の人」として一躍脚光を浴びることになるのは、72年、中国との国交回復の記念に贈られたパンダの飼育プロジェクトのチーフリーダーのときだった。ロンドン動物園留学中にパンダを世話する機会を得た中川さんは、当時、日本でただ一人のパンダ飼育経験者だった。

パンダ初公開の日、想像を絶する人が押しかけた。その騒動でパンダがパニックを起こし、公開を2時間で切り上げることに。「連日押しかける人々にパンダの姿を見せてやりたい。しかし、パンダの健康が第一。パンダを死なせてはならない」という絶対命令的な雰囲気の中で

人間と動物との共生

現在は、(財)日本動物愛護協会の理事長として、「人間と動物の共生」に取り組む。

「本当の命の大切さを実感できない時代になってしまいました。その根底には、人間の都合でどうにでもできるという思い上がりのようなものがあると思う。人を愛するということ、他の動物を愛することは同じなのです。」

そして、後輩たちに伝えたい想い。「人間のためだけの農学であつてはならない。農学が対象としている動物や植物の命を大切にするという原点にもう一度立ち戻つて考えていけば、真の農学が発展していくと思

いたんですね。科学を追究する者こそ、リスリズム的なこころの温かさ、瑞々しさを持つて欲しい。自分の学問だけにとどまらずに、よその世界をいかに知るかが大切です。」

パンダと過ごした日々

少年時代の夢を実現させた。

中川さんが「時の人」として一躍脚光を浴びることになるのは、72年、中国との国交回復の記念に贈られたパンダの飼育プロジェクトのチーフリーダーのときだった。ロンドン動物園留学中にパンダを世話する機会を得た中川さんは、当時、日本でただ一人のパンダ飼育経験者だった。

パンダ初公開の日、想像を絶する人が押しかけた。その騒動でパンダがパニックを起こし、公開を2時間で切り上げることに。「連日押しかける人々にパンダの姿を見せてやりたい。しかし、パンダの健康が第一。パンダを死なせてはならない」という絶対命令的な雰囲気の中で

2月1日ほど家に帰れない日が続きました。」

獣医の仕事は、かつて経験したことがない事態に直面することが少なくない。「参考にする教科書がない。一つ一つ経験したことを蓄積し、それを普遍化していく作業の繰り返しでした。」

人間と動物との共生

現在は、(財)日本動物愛護協会の理事長として、「人間と動物の共生」に取り組む。

「本当の命の大切さを実感できない時代になってしまいました。その根底には、人間の都合でどうにでもできるという思い上がりのようなものがあると思う。人を愛するということ、他の動物を愛することは同じなのです。」

です。動物も植物も先祖を辿つていくと源は一筋、一つの生命体にすぎません。生き物は生まれ変わりながら命をつないでいくという輪廻転生の考え方を大切にしたい。動物との共生の取組は、ずっと世話になってきた動物たちへの恩返しという想いがあります。輪廻転生という生き物の在り様を世の中に広めていきたいと思